

～森の民話茶屋運営委員会～

平成24年5月

「ふるさとの民話を
あなたにつないで・・・」

森の民話茶屋通信

vol.22



▼地震で倒れた立て看板



店主スケッチの「森の民話茶屋」

発行責任者／森の民話茶屋店主 後藤 みづほ

福島県安達郡大玉村玉井字前ヶ岳国有林7林班 TEL:0243-48-4648

◆営業期間 4月下旬～11月中旬(土・日・祝日のみ) 団体(12名様以上) 平日可能・要予約

◆営業時間 午前10時30分～午後4時30分

あの時から

平成二十三年三月十一日（金）午後二時四十六分。

忘ることの出来ないあの日あの時、皆さんはどこで何をしていらっしゃいましたか？

大きな揺れは只事ではない揺れでした。そして長く続いて、その長かつたこと。飛び出した人々の上に、揺れが収まつたかと思つていると、まるで映画のワンシーンのような横殴りの吹雪が。。。その夜、停電の中でラジオから聞こえて来た「自衛隊と消防署の電源車が福島原子力発電所に向かっています」の言葉に一体何が起きているのか、不安が募りました。でも、その時はどこか遠い所の出来事としか考えていませんでした。

あれから一年が経ちました。住み慣れた日々の暮らしから一転、日常に戻れない沢山の方々に心からお見舞いを申し上げます。「森の民話茶屋」はお陰様で何とか営業を続けることができました。当分の間、休業せざるを得ないと考えていた店主にメンバーはもとより村当局をはじめ、お客様からの「今年は何日から始めるのですか？」の問い合わせに励されました。でも、一番の原動力は「避難されている方々に十割そばを森の民話茶屋で振舞おう」という「じんだら会」（村有志の十割蕎麦の会）からの提案でした。丁度、F C T の「ゴジトレCHU！」から取材の申し込みがあったこともあり、例によつて、『これは民話茶屋の天井に住む民話の神様が「大丈夫、負けないで出発します」という意向なのだ』と信じてスタートを切ることになつたのでした。

それからメンバー総出で片付けが始まりました。看板が掛けてあつた太い丸太が根元から折れ、食器や花瓶、お客様から頂いた大切な可愛い置物も飾り棚から落下、破損。大きな冷蔵庫が三十㌢も移動していく揺れの大きさを物語ついていましたが、幸いにも建物自身に大きな被害が出ませんでした。天井から下がつた吊りランプ状の電灯も、たつた二つの電球の芯が切れた程度で済みました。その片付けの様子とこれから茶屋についての会議の様子も撮影が入り、いよいよ迎えた御もてなしの日が撮影本番当日。

四月二十四日は快晴。アットホームに避難している百二十名の方々への準備が始まりました。献立は打ち立て、茹で立ての十割そば、天ぷら（舞茸、なす、かぼちゃ）、豚汁、漬物数種。じんだら会の方々もさすがに手際よく時間通りに出来上がりました。避難している方々が次々に来店。語らい味わい笑い合う様子に撮影も順調です。「元気が出たよ」と避難所に帰つて行かれました。

その取材VTRが四月二十八日の夕方放映され、翌二十九日の再オープンには「テレビを見ましたよ」と大勢の方に来ていただき、中には「涙を流して見ましたよ」と話して下さるお客様もいらっしゃいました。（十割そばの注文もあり弁明に必死でした）

こうして始まつた一年でしたが、被災地全部がそうであつたように来客数は激減。関東圏からの団体は皆無でした。でも、こんな大変な時にもおいで下さり、あの時からの無事を喜び合つたり、慰め合つて再来店を約束してお帰りになられるお客様との触れ合いや絆は一層強くなつたように思われます。今年もまた、皆様の癒しの場所になれるよう食材の安全検査を徹底し、手間を惜しまないおふくろの手料理を準備してメンバー一同、皆様のご来店をお待ちしております。

平成二十四年五月吉日

店主 敬白

お母さんと民話を聞く

◆森の民話茶屋（大玉村）
「全部楽しかった」と話すのは南相馬市小高区の松本麻希ちゃん（5）。母恵子さん（33）、祖母芳子さん（71）、弟の宗大ちゃん（1）と一緒に、後藤みづほ店主の民話を聞いた。恵子さんは平日、仕事で夫と共に同市に戻るために、祖父母らとアットホームおおままに避難する子どもには、早く日曜日しか会えない。「宗大は避難後に歩けるようになつた」と目を細めるが、「早く一緒に自宅に帰りたい」と願う。



▲ 後藤さん宅の民話を聞く
◆ 麻希ちゃんら家族
■ 森の民話茶屋

民話を聞く南相馬市の家族

4月27日 福島民友新聞より

民話茶屋あれこれスナップ

「じんだら会」による蕎麦打ちイベントは再オープンの大きな力となりました・・



▲プレオープンの様子がテレビ放送されました。



▲ じんだら会会長 鈴木正雄さん

うまいものまつり

昨年秋に開催された“うまいものまつり”に出店し、多くの方が来店してくれました。



▲出店のようす



▲ 抹茶 おいしいね♪

関東から団体様ご来店

震災から1年経過した今年4月
関東から大型バスで37名のお客様に
ご来店いただき、多くの励ましの言葉を
いただきました。



▲皆さん、民話に聞き入っていました。

お花 ありがとうございます

昨年の5月7日(母の日)に二本松の
阿部さん、上田さん、渡辺さんの
仲良し3人娘からカーネーションの
鉢植えをいただきました。

ありがとうございました。



民話茶屋にお便りが届きました



昨年10月、浪江町の櫻本みさ子さんから、お便りをいただきましたのでご紹介します。

心のふるさと大玉村

3月11日の突然の大地震と大津波、翌朝よりの原発事故による突然の避難。

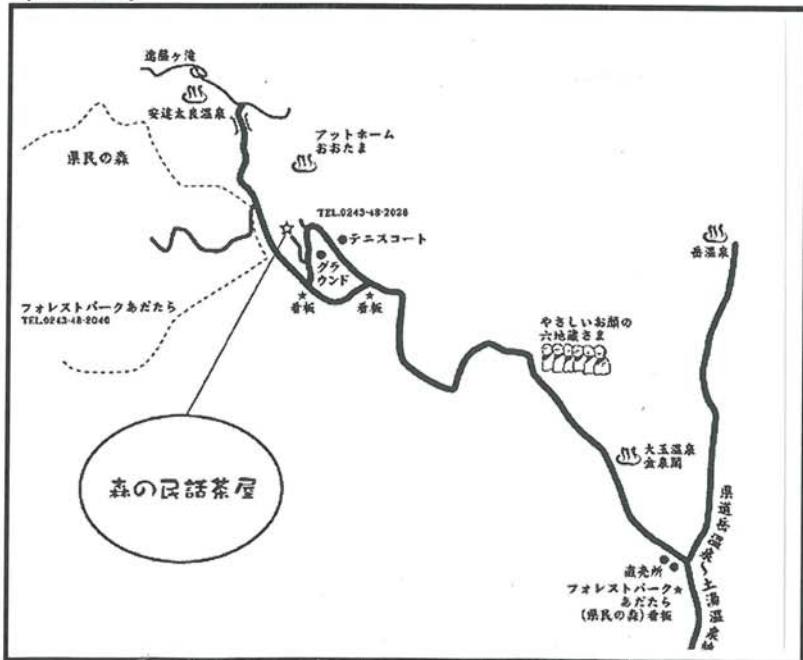
悪夢の「あの日」から6ヶ月という時が流れました。原発立地から10km圏内に居住していた私達には、何の進歩もなく不透明な光さえ見えず、虚しく不安で押し潰されそうになる時、ふつと思い出されるのは、突然の避難者を快く暖かい眼差しで迎え入れていただきました村長さんをはじめとする職員の方々、アットホームおおたまの支配人とスタッフの方々、大玉村、民話茶屋の皆さんのお優しい笑顔です。

私達は3家族11人でお世話になりました。アットホームでの食堂では、温かいご飯に味噌汁を口にした時、食事をすることのできる有難さと温かい人情の嬉しさと、この先の不安感で涙がとめどなく流れました。そんな私を見ていた小3の孫が、「残さず食べたよ」と口を拭きながら私を見つめていたのが印象的でした。

コテージでの生活も、残雪や軒下の氷柱が解けていくのと同様に私達の気持ちも少しづつ落ち着いて過ごせました。雪だけの山肌にフキノトウが芽吹き、山野草の小花達が風に揺られている可憐さは本当にホッとする光景でした。そして、その様は大自然からの強いメッセージのようにも感じられました。その斜面を道なりに下ると木造2階造りの庭先やテラスには私の大好きなパンジーの寄せ植え、桜の木々が立ち並び、安達太良の山々が遠方に、眼下には町並みが見渡せ、爽快感が味わえる絶景の場所にあるのが「森の民話茶屋」です。御膳料理は野菜の素材が活かされて、食物纖維豊富で低カロリー、どこか懐かしい味が楽しめました。抹茶と羊羹の味わいも心穏やかになれるひと時でした。店主である後藤さんは、もう1つの顔をお持ちで、店内で生の「語り部」を聞くことができ、孫たちの耳と瞳を釘づけにしてしまう楽しい時間を過ごすことができました。

今、郡山の地から半年前を振り返る時、アットホームの皆さんや民話茶屋の皆さんのお優しい笑顔や、かけていただいた言葉は、一生忘れることはできないでしょう。本当にお世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

(MAP)



多くの皆さんの温かいご支援やお言葉を
励みにスタッフ一同頑張っております。皆
さんのお越しをお待ちしております。

